

# 福岡工業大学 学術機関リポジトリ

小呂島環境調査による歴史の解明－近世史と国生み  
神話に関連して－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Environmental archaeology, Folklore, Historical archaeology, Mythology 作成者: 山口, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11478/00001589">http://hdl.handle.net/11478/00001589</a>

# 小呂島環境調査による歴史の解明

## —近世史と国生み神話に関連して—

山口 哲也 (社会環境学部社会環境学科)

### Elucidation of History by Environmental Survey of Orono-Island — In Connection with Modern History and National Myths —

YAMAGUCHI Tetsuya (Department of Socio-Environmental Studies, Faculty of Socio-Environmental Studies)

#### Abstract

Orono-Island is a remote island in the Sea of Genkai. The author conducted an environmental survey of Orono-Island. The research was ecology investigations for wild birds and endangered plant species. The studies developed from these research lead to some unknown history of Orono-Island. It was relationship between Kuroda domain and Orono-Island.

The second conclusion is that Onogoro-Island was Orono-Island. Onogoro-Island was the first land created by the creation gods which first appeared in Japanese mythology. Because the birou (*Livistona chinensis*) used by the ancient emperor for the ritual were on Orono-Island. It was thought to be related to solar rituals and the distribution of native birou (*Livistona chinensis*) around Kyushu-Island. In addition, The place name and shrine of Kyushu Island which comes out in the myth were also related to Orono-Island.

Further, conclusions of first one and second one must were correlated. Kuroda Narikiyo visited Orono-Island because he thought that Orono-Island was Onogoro-Island of the Japanese myth, and so he wanted brought back a characteristic plant.

Keyword: Environmental archaeology, Folklore, Historical archaeology, Mythology

#### 1. はじめに

##### 1.1 小呂島の概要

小呂島は、玄界灘の対馬・壱岐・糸島・博多湾・宗像・沖ノ島のちょうど中間にある周囲3.4kmの離島である。姪浜港より市営渡船で65分、毎日1便～2便が就航しており、市営渡船は島に渡るためのほぼ唯一の交通手段である。

人口は約200名で、江戸時代に黒田藩が漁業権の獲得、外国船への対策のため、糸島西浦より5家族を入植させたのが開拓の始まりとされている。黒田藩の鷹調達場、流刑場、朝鮮通信使の烽火台が置かれたため定番が定住し、江戸時代の一時期は鯨漁の基地でもあった。

古文書での初見は鎌倉幕府の「関東御教書」にある裁判の記録であり、博多の豪商である謝国明と宗像大社の領有権争いの記録である<sup>(1)</sup>。小呂島の海域は、古代では魏志倭人伝の渡海コース、中世では蒙古の襲来や豊臣秀吉の朝鮮出兵、近代では日本海海戦の戦場であり、常に九州の玄関口のみならず、日本の歴史に大きくかかわってきた現場である。しかし、小呂島自体の近世以前の様子や歴史は記録が残っておらず、不明のままであった。

##### 1.2 自然環境について

小呂島の集落は島の南側に集中しており、それ以外は断崖絶壁に囲まれる絶海の孤島である。そのため、島の周りは釣り客にとって絶好のポイントが多く、クロダイ・スズキ・アジなどを狙えるうえに、姪浜港から65分とあって釣り人にとって人気が高い島である。

また、対馬暖流に囲まれているため、ビロウ・ソテツ・クロバナイヨカズラ等熱帯性の植物が繁茂している。特にビロウとクロバナイヨカズラは、島北部のハチジョウスズキ群落とともに福岡県の絶滅危惧植物である<sup>(2)</sup>。

さらに、小呂島は野鳥にとって渡りの交差点となるため、春・秋には多くの種類が訪れる。そのため猛禽類の種類も多く、ハイタカ・ハヤブサ・ノスリ等の常駐する中型のもの、サシバ・ハチクマ等の渡りをするもの、魚を狙うミサゴ・トビといった大型のもの、モズやチョウゲンボウ、アオバズクといった小型のものなど様々な種類がみられる<sup>(3)</sup>。このような野鳥観察に訪れる愛好家が見られることもしばしばである。

小呂島周辺海域は好漁場であり、宗像や鐘崎といった近

隣の漁船も小呂島周辺海域を目指して漁に訪れる。しかし、近年の温暖化による海水温の上昇が回遊魚の種類やコースに影響を与えており、中国・韓国の乱獲と相まって、漁獲高の低下に影響を与えているのではないかと懸念されている。一方、ダイバーにとっては、夏場に身近に熱帯性の魚がみられるとあって、隠れた人気を博している。

### 1.3 産業について

主な産業は沿岸漁業、サザエ・アワビ漁と魚加工である。漁業は12月～4月までは個人漁のシーズンで、各家庭の船で定置網漁などによりカレイ・ヒラメなどを狙う。5月～11月までが巻き網船団による集団漁であり、旋網船2艘を中心に各船が役割分担をしてヤズ(ブリの幼魚)やアジ等を網に追い込む。旋網漁では若者から定年間際まで漁獲高に応じて平等な賃金が支給される。ヤズの一部は島内でフレークに加工し販売されている。近年福岡市学校給食にも採用され、年に1～2回ほど児童生徒の口に入るようになった。

サザエ・アワビ漁は十数名の海女によるもので、夏期のみ行われる。10m以上を素潜りで探り、前年に放した稚貝を次年度に回収する。しかし海女の仕事は、小呂島で生まれ育った女性以外はなかなかできる仕事ではなく、島外から嫁に来た女性にとってハードルが高い。

これまで、島の漁は長男が継ぐもの、島の女性は海女になることとして、代々掬が守られてきたが、漁への先行きの不安や島外からの嫁が増えたこともあってか、ここ数年で離島する家族が増え、就学年齢の子供の数が減っている。

小呂島への市営渡船は就航率76.6%(平成22年4月現在)と欠航率が低くなく、低気圧の影響で風と波が強くなると、帰宅できない可能性があり、来島を躊躇させる。また、一般客相手の旅館・民宿がないため、宿泊にはキャンプテントが欠かせず、渡航へのハードルとなる。

このようなことから、今まで島の取り組みとして、観光には全く力を入れておらず、漁業にたよる産業形態であったが、これも不安要素が大きくなってきているのが現状である。

## 2. 環境調査の目的

前章で述べた通り、小呂島の産業に対する先行き不安から、将来の島の存続にも影響を及ぼしかねない事態に発展しつつあることがわかった。そんな中で、理科教師として赴任した筆者は、小呂島の自然環境をもっと調査することが、小呂島への魅力を再発見することにつながると考え、これが、新たな産業につながったり、観光資源となったりする可能性も考えられる。そこで、小中学生と共に身近な環境調査を行い、必要に応じて歴史調査などの発展研究を行うこととした。

## 3. 環境調査の方法

### 3.1 野鳥調査

学校の行き帰り、昼休み、理科授業時などの時間に野鳥が観察されるとノートに記録、写真を撮影した。観察された種類を写真と図鑑で特定し、学校ホームページへ記録・公開した。また、日本野鳥の会福岡支部の小呂島観察データ<sup>(4)</sup>と照合し、小呂島野鳥観察リストを作った(表1)。

### 3.2 絶滅危惧植物の発見・調査

福岡県レッドデータブック2011に「小呂島に自生」と記載されている絶滅危惧植物や、福岡県レッドデータブックに「小呂島に自生」の記述がない絶滅危惧植物も発見し、これらの自生地を地図にまとめ(図1)、保護活動を行った(表2)。

### 3.3 オロシマチク (*Pleiblastus argenteostriatus* var. *Disticha*) (竹・笹類) 調査

「筑前於呂島原産」とされているが小呂島で自生が確認されていない日本最小の笹「オロシマチク」の調査をし、候補の笹について園芸種のオロシマチクと比較した。また、「オロシマチク」が広まった歴史とその背景を文献調査し、その真偽について検討した。

### 3.4 ビロウ (*Livistona chinensis*) (ヤシ科) 調査

福岡県絶滅危惧生物レッドデータブックには小呂島のビロウは記載されておらず、沖ノ島に4本のみ自生となっている。その理由は不明であるが、福岡県には沖ノ島のビロウ自生地が唯一の自生地とされている<sup>(3)</sup>。そこで、小呂島のビロウの生育状況と文献調査、また他の自生地や野生生育地との関連、ビロウの歴史文化的側面などについて調べた。

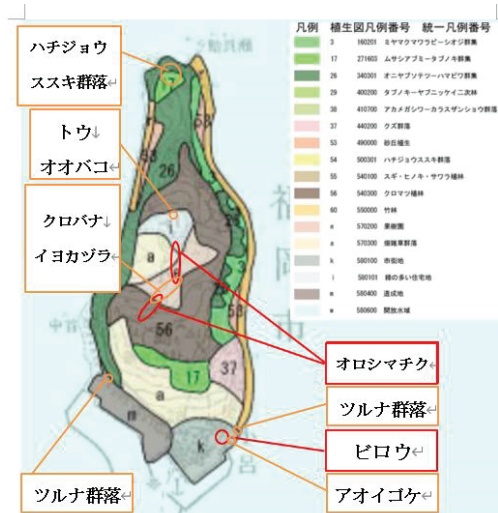


図1 小呂島の植生地図と発見した絶滅危惧植物 (福岡県植生図に加筆)

Fig.1 Vegetation map of Orono-Island and endangered plants discovered (added to Fukuoka Prefecture vegetation map).

## 4. 調査の実態と結果

### 4.1 野鳥調査について

4年間で観察記録できた野鳥の種類は95種。説明パネル

109 枚を作成、学校内に掲示した。日本全国で観察される鳥類はおよそ 400 種類といわれているので、その約 4 分の 1 が観察された事となる。この中には環境省が指定する鳥類レッドリスト (2012) に含まれるものが 12 種ある。また、ギンムクドリ、アカガシラサギ、シベリアアオジ等、本来日本にいないためごくまれにしかみられない迷鳥といわれるものも数種観察された(表 1 参照)。渡り区分と出現頻度

は、福岡県野鳥の会から提供いただいたリスト<sup>(4)</sup>を参考にした。小呂島は渡りをする鳥にとって、対馬海峡の横断や、東シナ海の横断において、格好の休憩地となることから、このような観察種類の密度が高い結果となった。

学校ホームページの情報発信により、野鳥観察に訪れた方も散見された。現在でも当時のパネルがホームページ上残されており、野鳥観察の参考にされている。

表 1 平成 22~25 年度 小呂島野鳥観察リスト  
Table1 Records of wild birds in Oro Island in 2010~13.

分 類		渡り区分	出現頻度	分 類		渡り区分	出現頻度		
ペリカン目	カツオドリ科	カツオドリ	旅鳥	稀	スズメ目	ツグミ科	コマドリ	旅鳥	少ない
	ウ科	ウミウ	冬鳥	普通			コルリ	旅鳥	普通
		ヒメウ	冬鳥	普通			ルリビタキ	旅鳥, 冬鳥	普通
コウノトリ目	サギ科	ゴイサギ	旅鳥	普通	ジョウビタキ		旅鳥, 冬鳥	普通	
		アカガシラサギ	旅鳥	稀	ノビタキ		旅鳥	少ない	
		アマサギ	旅鳥	普通	イソヒヨドリ		留鳥	普通	
		ダイサギ	旅鳥	普通	シロハラ		旅鳥, 冬鳥	普通	
		チュウサギ	旅鳥	少ない	ツグミ		旅鳥, 冬鳥	普通	
		コサギ	旅鳥	少ない	ウグイス科		ヤブサメ	旅鳥	普通
		アオサギ	旅鳥	普通			ウグイス	旅鳥, 冬鳥	普通
カモ目	カモ科	オシドリ	旅鳥	稀		センダイムシクイ	旅鳥	普通	
		マガモ	旅鳥	少ない		コメボソムシクイ	旅鳥	稀	
タカ目	タカ科	ミサゴ	留鳥	普通	キクイタダキ	旅鳥, 冬鳥	普通		
		ハチクマ	旅鳥	普通	ヒタキ科	キビタキ	旅鳥	普通	
		トビ	留鳥	普通		オオルリ	旅鳥	普通	
		アカハラダカ	旅鳥	少ない		サメビタキ	旅鳥	少ない	
		ハイタカ	旅鳥	普通		エゾビタキ	旅鳥	普通	
		ノスリ	旅鳥・冬鳥	普通	コサメビタキ	旅鳥	普通		
	サシバ	旅鳥	普通	ツリスガラ科	ツリスガラ	旅鳥	少ない		
	ハヤブサ科	ハヤブサ	留鳥		普通	シジュウカラ科	ヒガラ	旅鳥	稀
		チゴハヤブサ	旅鳥	少ない	シジュウカラ	旅鳥	少ない		
		チョウゲンボウ	旅鳥	稀	メジロ科	メジロ	留鳥?	普通	
チドリ目	チドリ科	コチドリ	旅鳥	少ない		ホオジロ科	ホオジロ	旅鳥	少ない
	シギ科	クサシギ	旅鳥	稀	コホオアカ		旅鳥	少ない	
	カモメ科	セグロカモメ	冬鳥	普通	キマユホオジロ		旅鳥	少ない	
		オオセグロカモメ	冬鳥	普通	カシラダカ		旅鳥	普通	
ウミネコ	冬鳥	普通	ミヤマホオジロ	旅鳥	普通				
ハト目	ハト科	カラスバト	旅鳥?	少ない	アオジ		旅鳥, 冬鳥	普通	
		キジバト	旅鳥?	普通	シベリアアオジ		旅鳥, 冬鳥	稀	
		ドバト	旅鳥	少ない	クロジ		旅鳥, 冬鳥	普通	
カッコウ目	カッコウ科	ホトトギス	旅鳥	少ない	アトリ科	アトリ	旅鳥	普通	
フクロウ目	フクロウ科	アオバズク	旅鳥	少ない		カワラヒワ	旅鳥, 冬鳥	普通	
アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	旅鳥	少ない		マヒワ	旅鳥, 冬鳥	普通	
		アマツバメ	旅鳥	普通		アカウン	旅鳥	稀	
シメ	旅鳥, 冬鳥	普通	ハタオドリ科	スズメ		旅鳥?	少ない		
プッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		旅鳥	少ない	ムクドリ科	コムクドリ	旅鳥	少ない
プッポウソウ科	プッポウソウ	旅鳥	少ない	ムクドリ	旅鳥		少ない		
ヤツガシラ科	ヤツガシラ	旅鳥	少ない	ギンムクドリ	旅鳥		稀		
スズメ目	ヒバリ科	ヒバリ	旅鳥	少ない	カラス科	コクマルガラス	旅鳥	稀	
		ツバメ科	ツバメ	旅鳥		普通	ミヤマガラス	旅鳥	少ない
	セキレイ科		ツメナガセキレイ	旅鳥		少ない	ハシボソガラス	留鳥	普通
			キセキレイ	旅鳥		普通	ハシブトガラス	留鳥	普通
			ハクセキレイ	旅鳥		少ない	カササギ	留鳥	稀
			セグロセキレイ	旅鳥		稀	アカゲラ	旅鳥	稀
			ピンズイ	旅鳥	普通	キツツキ目	キツツキ科	12目 34科 95種	
	タヒバリ	旅鳥	少ない	渡り区分					
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	旅鳥, 冬鳥	普通	留鳥: 一年をとおしてみられるもの				
	モズ科	モズ	旅鳥	少ない	夏鳥: 定期的に夏季に渡来し、繁殖するもの。渡りで通過するものが多				
チゴモズ		旅鳥	稀	場合でも定期的に繁殖しているものであれば優先的に夏鳥とした					
タカサゴモズ		旅鳥	稀	冬鳥: 定期的に冬季に渡来し、越冬するもの。					
ミソサザイ科	ミソサザイ	旅鳥	普通	旅鳥: 春、秋に通過するもの。					



4.2 絶滅危惧植物の発見・調査について

「小呂島に自生」と記載されている希少植物を3種発見した。また「小呂島に自生」と記載されていない希少植物を2種発見した。2種類については、保護のための立て看板を設置し、平成24年度小呂小中学校学習発表会にて調査結果の発表と注意喚起を行った(表2参照)。



図2 小呂島の地図と七社神社の位置 (✓印の位置)  
Fig.2 Map of Oro-Island and the location of shichisya-Shrine.



図3 小呂島七社神社に生育するビロウ  
Fig. 3. Native *Livistona chinensis* in Oro Island at Shichisha shrine.

小呂島のビロウは、大小20本以上確認でき生育しているにもかかわらず、今まで絶滅危惧植物として認識されていなかった。(筆者撮影)

表2 小呂島の絶滅危惧植物リスト  
Table 2 Endangered species plants of Oro Island.

和名	学名	レッドデータブックの記載	絶滅危惧レベル	発見場所と対策
クロバナイヨカズラ(キョウチクトウ科)	<i>Vincetoxicum japonicum</i> f. <i>puncticulatum</i>	イヨカズラとして記載されており、福岡県で小呂島が唯一の自生地と記載。	絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が高い)	主に島の中部、学校への通学路わきに多く自生している。草刈りで刈られないように、注意板を立て、注意喚起をした。
アオイゴケ(ヒルガオ科)	<i>Dichondra micrantha</i> Urb.	玄界島、小呂島に自生していると記載。	準絶滅危惧種(絶滅の危険が迫る)	集落周辺の道端、神社の境内、石垣の隅などにカーペット状に群生。
トウオオバコ(オオバコ科)	<i>Plantago japonica</i>	小呂島、沖の島、相島のように自生すると記載。	絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が高い)	学校敷地内に発見。草刈りで刈られないように、注意板を立てて注意喚起した。
ハチジョウススキ(イネ科)群落	<i>Miscanthus condensatus</i> Hack.	植生区分は、河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生等。海岸断崖地植生。小呂島のハチジョウススキ群落	カテゴリーⅣ(要注意)	島の北部に自生しているらしいが、ほとんど人が踏み入らない場所であり、未確認。
ビロウ(ヤシ科)	<i>Livistona chinensis</i>	福岡県では沖ノ島に4個体のみ自生と記載。	絶滅危惧ⅠA類(最も絶滅の危険が高い)	七社神社境内には、大小含めて20本以上が生育する。社郷内は古くから一木一草とも手を付けてはならないとの掟が守られている。
ツルナ(ハマミズナ科)群落	<i>Tetragonia tetragonoides</i>	福岡市では雁ノ巣、志賀島、玄界島のように自生と記載。	カテゴリーⅣ(要注意)	小呂島の東西海岸の2か所に群落を発見。ゴミ焼き場の近くなので、発表会で注意喚起をした。

福岡県レッドデータブック2011には、小呂島に絶滅危惧植物が4種記載されているが、そのうち3種の自生を確認し、新たにビロウとツルナ群落の2種を確認できた。

#### 4.3.1 オロシマチク調査

購入したオロシマチクは、長さ 2~3 cm と非常に葉が小さく、一つの茎から 6~10 枚の葉が出ていた。道路脇の笹は、4~5 cm と葉が少し大きく、一つの茎から 5~9 枚の葉が出ていた。しかし、人に踏まれる山道にある笹は、葉は小さく、枚数も多めで園芸種とほぼ同様のものもあった。

(図 4 参照)



図 4 園芸種のオロシマチク(左)と小呂島の笹(右)

Fig. 4 Garden plant of Oroshimachiku(left) and bamboo grasses in Oro Island(right).

園芸種のオロシマチクは、小呂島の笹に比べ、葉が小さく茎から出る葉の枚数も多い。(筆者撮影)

小呂島の笹は、購入したオロシマチクより葉が大きめで、枚数も少なめであったものの、文献に記される特徴と小呂島の笹の特徴はよく似ている<sup>(5)</sup>。オロシマチクには多くの品種があるため、「江戸時代に筑前国於呂島よりもちかえった」ならば、品種改良されている可能性もある。園芸種のオロシマチクは、カットすればより小さな葉を出し、グラウンドカバーになるとある。自然と人の足によって踏まれる山道の笹は、この状態であったと考えると同じ特徴を備えていることとなる。

山道にみられた笹は、園芸種に酷似している(筆者撮影)



図 5 園芸種オロシマチク(左)と小呂島山道にある笹(右)

Fig. 4 Garden plants of Oroshimachiku(left) and bamboo grass in Oro Island at the mountain path(right).

#### 4.3.2 オロシマチクの文献調査

竹笹類図鑑によると「嘉永年間に江戸巢鴨の植木屋長太郎が黒田のお殿様のお伴をして 筑前に於呂島へ渡り、このオロシマチクを持ち帰って広めた」とある<sup>(6)</sup>。この真偽について調査した。

「植木屋長太郎」とは別名「巢鴨の花太閤内山長太郎」とも言われ、江戸末期~明治時代に大名とも交流があった植木屋で財を成した採花園の内山長太郎(1804~1883)のことと思われる。巢鴨の竹笹作りの倅として生まれた。菊づくりの名人で、巢鴨に「栽花園」をひらく。チョウタロウユリは彼の名に由来する<sup>(6)</sup>。

「黒田のお殿様」とは、この時代蘭学・本草学に詳しく博物大名として知られた黒田藩主 10 代斉清(1795~1851)(図 6 左)と思われる。シーボルトと対談し植物標本を交換したほど造詣が深かった。幼い時から鳥類に興味を持ちアヒルを飼育していた。のちに『鶯経』、『鴨経』、『駿遠信濃弁葉鑑』などの鳥類に関する著書を残した(図 6 右)<sup>(7)</sup>。若い時から眼病を患い、家督を譲るときはほぼ失明状態であった。黒田斉清以降、黒田家の子孫は鳥類に詳しい者が多く、15 代目長禮、16 代目長久らの鳥類学者も輩出し、長久は山階鳥類研究所の所長もつとめた<sup>(8)</sup>。



図 6 黒田斉清と斉清画の鶯鳥の図(福岡市総合博物館蔵)

Fig. 6 Narikiyo Kuroda and his picture of a goose. (This is owned by Fukuoka City Museum).

残念ながら黒田斉清と内山長太郎が小呂島に来た直接的な証拠は今回見つからなかったが、状況としては十分ありうることがわかる。小呂島は野鳥の宝庫であり黒田藩の鷹狩り用の鷹を調達する島でもあった。野鳥に詳しく多くの著書を残した斉清ならば、小呂島に来島する動機は十分すぎるほどあるはずである。また、本草学にも詳しいことから珍しい植物があれば、内山長太郎とともに小呂島を訪れ、江戸から全国へ広めたこともありうる。

また小呂島の地名に「殿の山」と呼ばれる場所がある。名前の由来は不明だが、目の神の薬師堂のすぐそばにある(図 2)。眼病を患っていた斉清がもし来島したならば、必ずや薬師堂にお参りしたのであろう。

オロシマチクに関する伝承は、当時の歴史や小呂島の状況との一致点が多い。今後、長太郎の日記や黒田藩の記録などの一次資料が見つかることが課題である。



## 4.4 ビロウの調査について



図7 沖ノ島のビロウ(左)と小呂島の七社神社のビロウ(右)  
Fig. 7 Birou of Okino Island(left) and Shichisha shrine  
in Orono Island(right).

沖ノ島のビロウが日本最北域であり、小呂島はそれに次ぐ野生生育地と考えられる。(左：須田隆一撮影 右：筆者撮影)

## 4.4.1 ビロウの生育環境

ビロウはヤシ科の植物であり熱帯性の植物である。このような植物にとって、玄界灘は高緯度であるが、対馬暖流が通るため気候が温暖であり小呂島は冬でも無霜地帯である<sup>(9)</sup>。このような環境がビロウの生育を可能としている。

ビロウが生育する小呂島七社神社(図2・3)は、島の産土神でありその社郷内は一木一草とも採ってはならないとの掟があり、今でも厳格に守られている。社郷内の本殿うら庭は、石垣に囲まれた250㎡ほどの区画があり、うっそうと草木が茂っている。その中に幹回り1m以上に達するビロウの大樹が6本あり、その周辺に多数の幼木が存在している。この社郷内で人の手によらず世代交代していると考えられ、野生状態と言える。

## 4.4.2 小呂島ビロウの文献記録

小呂島のビロウについては、昭和四年の天然記念物調査の際に記述されており、この時すでに「ビロウの大樹6本あり」と、その存在が記録されている<sup>(10)</sup>。

また、小呂島の集落の地名には「コバの下(コバはビロウの古名)」や<sup>(11)</sup>、島から南1~2kmほどの漁場にも「ビロウ」の名があり、古くからビロウの存在が知られているため、社郷内のビロウは江戸時代にはすでに生育していたことがうかがえる。

## 4.4.3 歴史的文化的側面

ビロウは古代天皇家にとって、松竹梅よりも、最も神聖な植物であったとされ、その葉は扇の原型であったとか、

幹は男根や蛇信仰の象徴であったとの研究もある<sup>(12)</sup>。

また、天皇の代替わりの儀式である踐祚大嘗祭においては、新しい天皇が禊をする百子帳という小屋の屋根材は、ビロウの葉でなくてはならないとの決まりがあり、日本の文化や祭祀に深く根付く祭祀植物であることが分かる。現在、南西諸島ではビロウの葉は祭祀に欠かせない「ホキ扇(ホキはビロウの地方名の一つ)」(図8参照)の材料としても知られ<sup>(13)</sup>、元々南洋の植物であることから、これらの南西諸島の祭祀が古代天皇家の祭祀に影響を及ぼしたことが推測される。



図8 ホキ扇(クバ扇)

Fig. 8 Hokisen (Kubasen), a folding fan.

ビロウの葉の中心部分を扇形に切り取り扇とす。南西諸島での祭祀では、いまだ必須のアイテムである。(筆者撮影)



図9 枇榔毛の車

Fig. 9 An ox carriage named "The car of birou pile".

京都時代祭で登場する枇榔毛の車を再現した牛車。屋根のところからぶら下がるのがビロウの葉。

平安時代には「枇榔毛の車」という、天皇に近い者しか

乗れない牛車があり、その屋根材もまたビロウの葉が装飾してあった(図9)。

これなど、百子帳の日常生活品への転換と考えると、天皇に近い者しか使えなかったのは頷けることである。

#### 4.4.4.主なビロウ野生生育地と小呂島の位置関係

##### (ア)長崎県平戸市平戸口・古館ビロウ自生地

平戸口は野田熊野神社の社郷内にあり、狭い海峡を隔てて対岸に古館ビロウ自生地が存在している。古館は平戸島であるが、平戸口は九州島であり、ここが九州本土の中で最北端の自生地として、長崎県の天然記念物となっている。

野田熊野神社は、元は海寺といい大宝2年(702)文武天皇の御代に役小角が全国を回国した際、立ち寄った場所という伝承がある。この平戸口の位置は、小呂島でビロウが生育する七社神社の拝殿の向く方位にある(図10)。

##### (イ)大分県佐伯市竹野浦自生地

竹野浦は豊後水道側で、九州最北端自生地となる。米水津村の古い墓地(最も古いものは16世紀)に自生している。佐伯市は小呂島からみて冬至の日出方位に近い(図10)。

また、竹野浦にある唯一の神社である天満宮という神社の境内にもビロウがあるが、この天満宮の参拝方位は正確に沖ノ島方位となる(図10)。つまり、竹野浦の自生地は、玄界灘の両方のビロウ野生生育地と関連する可能性がある。

##### (ウ)沖ノ島自生地

沖ノ島のビロウは4本自生していることがレッドデータブックに記述されている<sup>(3)</sup>。しかし、このビロウの自生場

所が、沖ノ島の崖の上であることと、ビロウの種子は大きすぎて鳥が運ぶことができないといわれていることから、沖ノ島のビロウは海流分布によってではなく、人為的な移植によるものではないとも考えられている<sup>(14)</sup>。つまり、もともとは天皇家の古代祭祀のために移植されたものだった可能性がある。

##### (エ)その他の九州・四国沿岸・離島の自生・野生生育地

上記以外にも、九州・四国の沿岸や離島には、ビロウ野生生育地がみられる。

ビロウ生育地のリストアップの資料は、過去の天然記念物調査報告<sup>(15)</sup>、長崎大学中西教授の論文<sup>(16)(17)</sup>、九州・四国各県のレッドデータブック<sup>(18)~(23)</sup>、柳田國男の海南小記の記述<sup>(24)</sup>、林野庁のホームページ<sup>(25)</sup>、自治体のホームページ<sup>(26)</sup>、島嶼名辞典<sup>(27)</sup>などを参考にした。各県ごとのビロウ生育地は以下のとおり番号をふり地図に記載した。日出・日没方位の計測には、地図サイト「日の出日の入時刻方角マップ<sup>(28)</sup>」を用いた。なお17, 34~38については、現在ビロウの生育は確認されていないと考えられ、島の名や古名および「海南小記」の記述などから過去野生ビロウが生育していたと推測した。これらの生育地にはお互いに、正確に東西の関係や、夏至冬至の日出・日没方位で関連付けることのできる位置関係にあるものが多く見受けられる(表3, 図11)。九州・四国沿岸、離島の生育地が38か所確認できたが、そのうち日出日没方位で関係づけられた生育地は27か所ある。

長崎県五島列島の生育地は、近隣の生育地や遠隔の生育地とも関連付けられる。また、豊後水道においては、高知



図10 北部九州における小呂島と主なビロウ自生地・野生生育地の関係

Fig.10 Relationship between Orono-Island and major birou's native fabrics in Northern Kyushu, Japan.



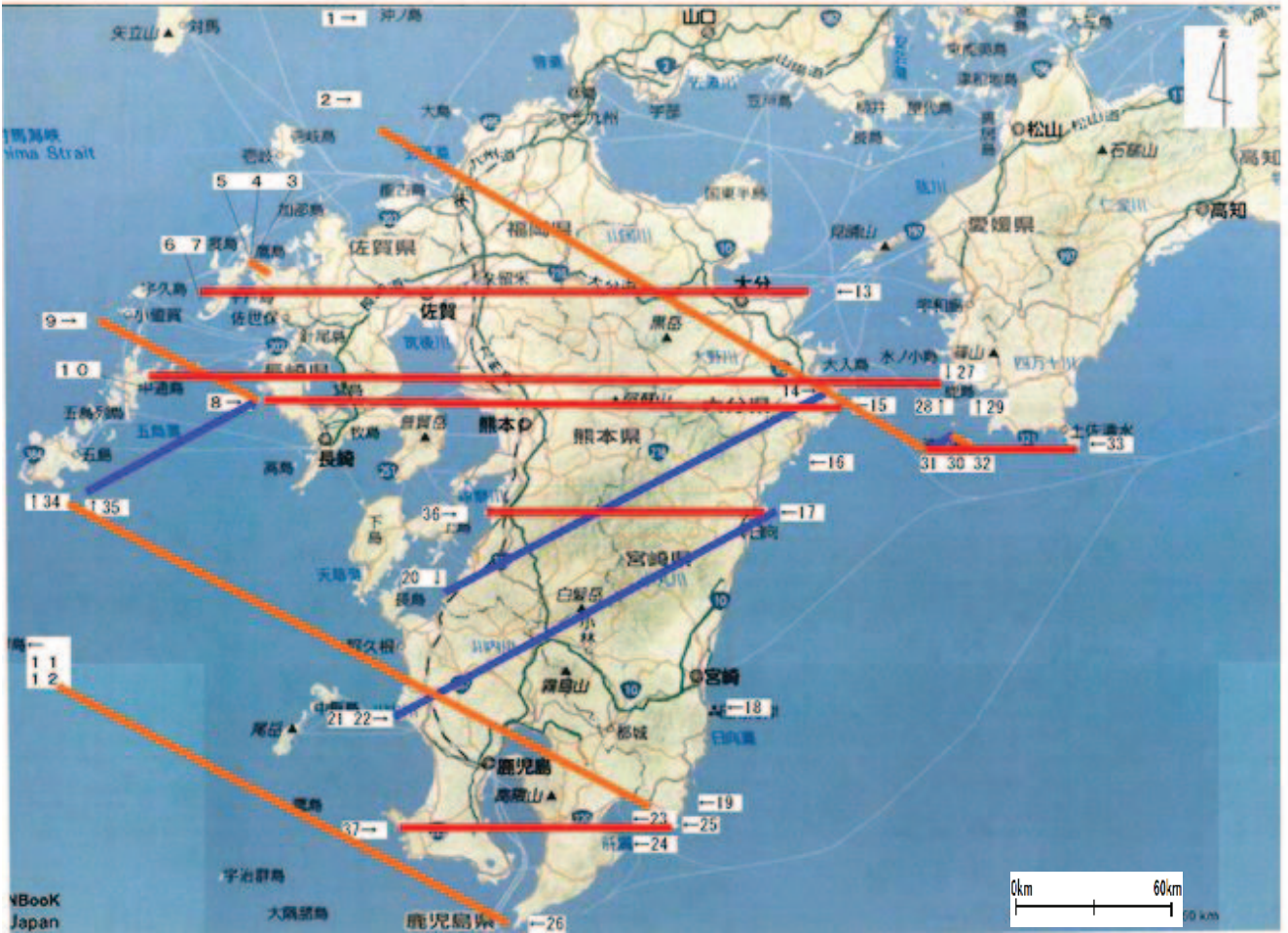


図 11 ビロウの各生育地（1～38）と日出・日没方位の関係（方位の誤差はおおむね±1° 以内。ラインの凡例は表 3）

Fig.11 The relation between native birou points and a directions of sunrise or sunset.

日出日没方位関係	野生生育地の関係
春分（秋分）の日出・日没方位 	[31 姫島] ⇔ [33 足摺岬] [10 相の島] ⇔ [14 竹野浦] ⇔ [28 小地島] [15 沖黒島] ⇔ [8 大墓島] [36 大築島(檳榔島)] ⇔ [17 枇榔島] [6 上阿値賀島] ⇔ [13 高島] [37 沖秋目島(檳榔島)] ⇔ [25 都井岬]
冬至日没方位(夏至日出方位) 	[30 二並島] ⇔ [31 姫島] [14 竹野浦] ⇔ [20 恋路島] [17 枇榔島] ⇔ [21 羽島崎, 22 沖ノ島] [8 大墓島] ⇔ [35 美漁島]
夏至日没方位(冬至日出方位) 	[2 小呂島] ⇔ [31 姫島] [3 平戸口] ⇔ [4 黒子島] ⇔ [5 平戸古館] [25 都井岬] ⇔ [34 美郎島] [8 大墓島] ⇔ [9 美良島] [32 蒲葵島] ⇔ [30 二並島] [11 男島, 12 女島] ⇔ [26 佐多岬, 枇榔島]

表 3 ビロウ野生生育地と日出日没方位の関係

Table 3 The relations between native birou points and a directions of sunrise and sunset.

県南部で狭い範囲の関連も見られるが、多くの生育地が九州島を挟んだ長崎県の生育地と東西関係があり、九州南西部とも冬至日の入（夏至日出）関係で関連している（図 11）。一方、九州島南東部ではこのような方位では関連付けられない生育地も多い。

このような位置関係から、九州島南部では自然に自生していたものが、豊後水道や長崎県の生育地では祭祀に伴う人為的な生育地の拡大が起こり、現在の野生生育地が残っているのではないだろうか。つまり、九州島・四国の沿岸・およびその離島におけるビロウ野生生育地は、もともとその多くが、南方のビロウ祭祀と太陽信仰が合体した祭祀移植によって広がってきた可能性を指摘しておきたい。各県の野生生育地とナンバリングは以下の通り。

- ・福岡県…宗像市[1 沖ノ島]、福岡市 [2 小呂島]
- ・長崎県…平戸市 [3 平戸口, 4 黒子島, 5 平戸古館, 6 上阿値賀島, 7 下阿値賀島]、長崎市 [8 大墓島]、北松浦郡小値賀町 [9 美良島]、南松浦郡新上五島町 [10 相の島]、五島市 [34 美郎島, 35 美漁島, 11 男島, 12 女島]
- ・大分県…大分市[13 高島]、佐伯市 [14 竹野浦, 15 沖黒島]

- ・宮崎県…延岡市 [16 高島]、門川町 [17 枇榔島]、宮崎市 [18 青島]、串間市 [19 築島]、串間市 [25 都井岬]
- ・熊本県…水俣市 [20 恋路島]、八代市 [36 大築島(檳榔島)]、天草市 [38 飛龍島]
- ・鹿児島県…いちき串木野市 [21 羽島崎, 22 沖ノ島]、川辺郡坊津町 [37 沖秋目島(檳榔島)]、志布志町 [23 枇榔島]、肝付町 [24 火崎]、南大隅町 [26 佐多岬, 枇榔島]
- ・愛媛県…愛南町 [27 鹿島, 28 小地島, 29 当木島]
- ・高知県…宿毛市 [30 二並島, 31 姫島, 32 蒲葵島]、土佐清水市 [33 足摺岬]

#### 4.4.5 広島大学によるピロウの遺伝子検査

広島大学の山田俊弘准教授のチームが2014～2016年に行った、南西諸島から九州四国沿岸の23集団408個体のピロウ遺伝子解析<sup>(29)</sup>によって、その分布がどのように形成されたか推定している(図12参照)。

この検査によって「奄美諸島以南ではピロウの遺伝的多様性が高く集団固有の対立遺伝子が観察されたのに対し、トカラ列島以北では多様性が低く、特定の対立遺伝子のみが高い頻度で観察された」という。つまり、「奄美諸島以南の集団が安定的に温暖な気候において安定的に存在したのに対し、トカラ列島以北の集団は最終氷期以降など比較的最近の分布拡大によって形成されたことを示唆するもの」

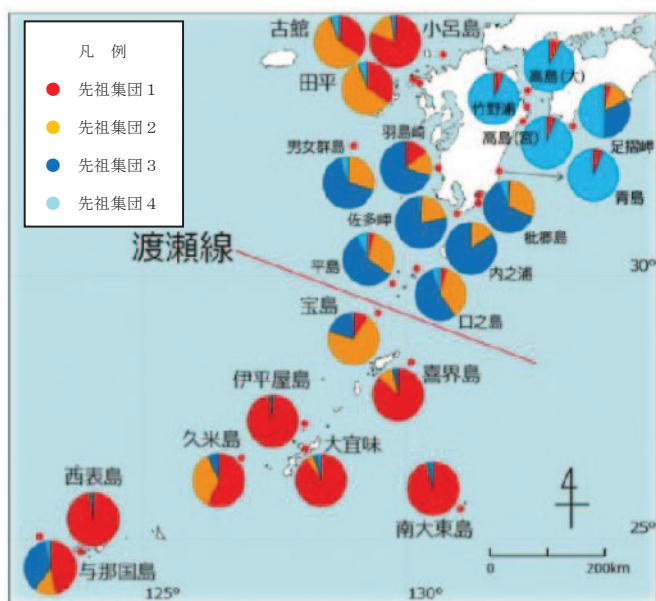


図12 広島大学の遺伝子検査結果<sup>(28)</sup>(全23集団を4つの先祖集団に分配した structure 解析の結果)

Fig.12 Results of birou gene tests by HiroIsland University.

※各集団の個体が確率的に4つの先祖集団のどれになるか割合を示したグラフ。玄界灘周辺の3集団は、赤やオレンジの割合が多く、渡瀬線以南のピロウと同じ祖先集団に起因している可能性が高いことを示す。

と解説している。しかし、この南西諸島のピロウの特徴を玄界灘の3集団(小呂島・古館・田平)は示しており、これは海流による種子の分布では説明がつかず、「ピロウは古代より最も神聖視された植物で神道における祭祀に利用されることから人為起源である可能性が高い」と結論付けている。これは筆者の推定と合致する。

#### 4.4.6 小呂島の古代の歴史について文献調査

小呂島の古代に関する遺跡は南側住宅付近が神之下遺跡として遺跡指定してあるが、2019年現在では本格的な調査は行われていない。唯一、2014年3月に西谷正九州大学名誉教授(元日本考古学協会会長)が小呂島を訪れ半日間踏査した結果、小呂島頂上にある嶽宮神社横の大岩が、「古代の磐座信仰の依り代」だった可能性を指摘している<sup>(30)</sup>。

小呂島の古文書の初出は中世鎌倉時代の裁判の記録である。しかし、江戸時代に書かれた香椎宮の編年期には、神龜元年(724)の香椎宮創建当時の四至として「西は老岐、東は鴨山、南は住吉、北は尾呂」という記述があり、小呂島が香椎宮領域の北端として神聖視された可能性がある。

#### 5. 考察

小呂島のピロウの遺伝的特性と、他の野生生育地との関係、文献調査から、小呂島は重要な祭祀の島であった可能性があることが推測される。そこで、ピロウに着目すると、日本の創生神話である「国生み神話」において、日本最初の国土である「淤能碁呂島」として小呂島が登場している可能性がでてきた。その理由は、仁徳天皇記にある以下の歌である。

淤志豆流夜(おしてるや)那爾波能佐岐用(なにはのさきよ)  
伊傳多知豆(いでたちて)和賀久邇美禮婆(わがくにみれば)  
阿波志摩(あはしま) 淤能碁呂志摩(おのごろしま)  
阿遲摩佐能(あじまさの) 志麻母美由(しまもみゆ)  
佐氣都志摩美由(さけつしまもみゆ)

この歌には、国生み神話に登場する最初の島である「淤能碁呂島」とともに、「アジマサの島」が登場している。「アジマサ」とはピロウの古名の一つであり、古事記・日本書紀にも登場する。「淤能碁呂島」は現在どの島ことであるか定説はないが、候補の多くが瀬戸内海に集中する。伊邪那美命が淤能碁呂島で生み出した最初の島が淡路島となっているためである。ところが瀬戸内海にはピロウの野生生育地がなく、この歌の謎となってきた。そこで、淤能碁呂島の場所をピロウが自生する海域に絞って考えると、玄界灘の小呂島は符合してくる。小呂島の近世までの表記は「於呂島」である。さらに能古島の古文書の初出の表記が「能護島」である<sup>(31)</sup>ことを考えると、「淤能碁呂島」とは「於呂」と「能護」の合成語である可能性がでてくる。実際、小呂島と能古島を結んだ延長線上に高千穂神社があり(図13)、毎年春の大祭では高千穂にある「おのころ池」の「おのころ島」の周りを神輿で3周する神事が行われている。



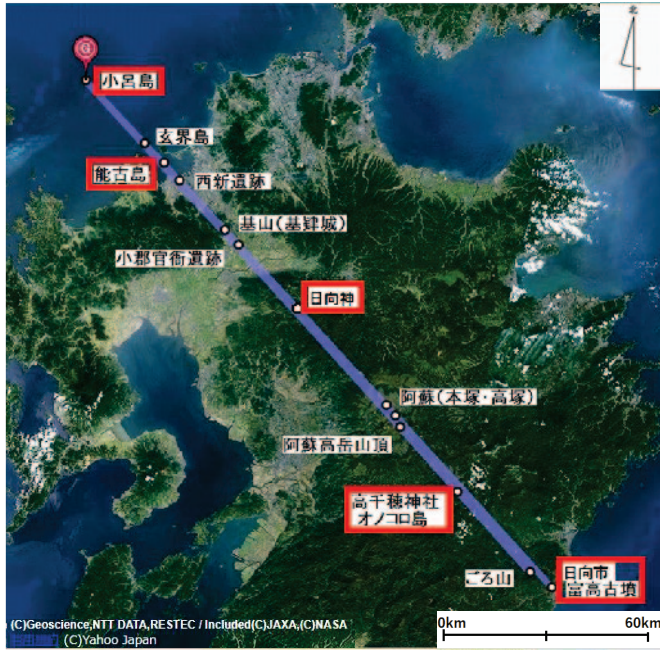


図 13 小呂島ー能古島ライン延長線上の遺跡や地名  
Fig.13 The names of ruins and places on the extended line of Oro Island-Noko Island.

さらにこのライン上に多くの遺跡や地名の一致を示したうえで日向市に至る。「高千穂神社」も「日向」地名も神話上重要地名である。日向市は初代神武天皇が東征に出発した場所とされている(図 13)。これは小呂島と能古島が「日本創世神話」の島「淤能基呂島」であったことの証左であろう。

6. 結論

小呂島の環境調査、古代の文献調査からピロウを鍵として考えると、小呂島 (+能古島) = 淤能基呂島と仮定することで、日本神話と地名が合致することがわかり、玄界灘から日向市にかけて天皇家の祖先にかかわる人々の移動が起こったことが推測された。拙著にその研究成果を詳しく述べている<sup>(32)</sup>。この仮説は、糸島を中心とした玄界灘近辺で弥生時代日本最初の王墓や漢王朝と交流した遺物を含む遺跡等が多く見つかるという考古学の成果と合致している。

糸島の井原鑓溝遺跡 (1781~1788) や三雲南小路遺跡 (1822 年)、志賀島では「漢倭奴国王」金印 (1784 年) といった発見が相次いであり、その内容が藩に報告された。

黒田斉清は 1795 年に生まれ 1834 年に隠居、1851 年死去しており、これらの発掘・報告を当然藩主として知っている立場だった。日本創世神話と当時の遺跡発掘の成果を考え合わせるなら、小呂島と能古島でオノゴロ島という発想があってもおかしくない。黒田斉清がわざわざ小呂島に来たとするなら、自身の鳥の研究だけでなく、小呂島がオノゴロ島であるという発想があった可能性がある。江戸から著名な植木屋をわざわざ連れてきて、オロシマチクを世に広めたことは、そんな背景があったのではないだろうか。

文 献

- (1) 高田茂廣：『玄界灘に生きた人々：廻船・遭難・浦の暮らし』, 海鳥社, (1998)
- (2) 福岡県環境部自然環境課：『福岡県の希少野生生物ー福岡県レッドデータブック 2011ー普及版』, (2011)
- (3) 小呂小学校創立百周年・小呂中学校創立五十周年記念実行委員会：『海祭』, 海鳥社, pp.111~113, (1998)
- (4) 「日本産鳥類リスト」『日本鳥学会誌』46 巻 1 号, (1997)
- (5) 鈴木貞雄：『日本タケ科植物総目録』, 学習研究社, (1978)
- (6) 花森屋敷Ⅲ：「マツバボタン-2 追捕 柏木吉三郎『亜墨利加草類図』松葉社丹と命名」, ブログ『FLOS, 花, BLUME, FLOWER, 華, FLEUR, FLOR, UBETOK, FIORE』, (2016)  
[https://hanamoriyashiki.blogspot.com/2016/06/2\\_27.html](https://hanamoriyashiki.blogspot.com/2016/06/2_27.html)
- (7) 宮崎克則・原三枝子「黒田斉清・黒田長博ー好学・開明的なふたりの藩主」, 『九州の蘭学・越境と交流』, 思文閣出版, pp.193-99, (2009)
- (8) 平岡 考：「軍師官兵衛の末裔は日本鳥類学の大家」, 山階鳥研ニュース, 255 号, pp.2~3, (2014)
- (9) 小呂小学校創立百周年・小呂中学校創立五十周年記念実行委員会：『海祭』, 海鳥社, p.117, (1998)
- (10) 昭和四年史跡名勝天然記念物調査報告第四輯 福岡県
- (11) 小呂小学校創立百周年・小呂中学校創立五十周年記念実行委員会：『海祭』, 海鳥社, p.68, (1998)
- (12) 吉野裕子：『扇一性と古代信仰』, 人文書院, (1984)
- (13) 大浦ゆかり：『クバー沖繩のピロウ(蒲葵)』, BIOSTORY, vol.20, pp.44~47, (2014)
- (14) 秋道智彌：「東アジアの海洋文明と海人の世界ー宗像・沖ノ島遺産の基盤」, 『宗像沖ノ島関連遺産群 研究報告Ⅱノ1』, (2012)
- (15) 文部省：『全国植生図および主要動植物地図』, (1969)
- (16) 中西弘樹：『九州北部における島嶼偏在植物の分布と生態』, 植生学会誌『Vegetation Science』, vol.27, pp.1~9, (2010)
- (17) 中西弘樹：「長崎県における島嶼偏在植物の分布」長崎大学教育学部研究紀要ー『自然科学』, No.79, pp.5~10, (2011)
- (18) 中西弘樹：「長崎県レッドデータブックー植物編ー」, p.60  
[http://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/170000/175000/p004017\\_d/fil/02sy-okubutsu.pdf](http://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/170000/175000/p004017_d/fil/02sy-okubutsu.pdf)
- (19) 熊本県：『改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物ーレッドデータブックくまもと 2009ー』, p.104  
[https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c\\_id=3&id=709&sub\\_id=1&flid=5&dan\\_id=1](https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=709&sub_id=1&flid=5&dan_id=1)
- (20) 真柴茂彦：「ピロウ」, 『レッドデータブックおおいた 2011 大分県の絶滅のおそれのある野生生物』, p.61, p.110  
<http://www.pref.oita.jp/10550/reddata/bunrui/syushi3.html>
- (21) 大分県：「豊後水道及び後背地域」『レッドデータブックおおいた 2011 大分県の絶滅のおそれのある野生生物』  
<http://www.pref.oita.jp/10550/reddata/data/map/8.pdf>
- (22) 愛媛県：「高等植物 ピロウ」, 『愛媛県レッドデータブック』  
[https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/detail/09\\_04\\_010850\\_5.html](https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/detail/09_04_010850_5.html)
- (23) 高知県：『高知県レッドリスト (植物編) 2010 改訂版』, (2010)  
[https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/030701/files/2011012600100/2011012600100\\_www\\_pref\\_kochi\\_lg\\_jp\\_uploaded\\_attachment\\_67511.pdf](https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/030701/files/2011012600100/2011012600100_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_67511.pdf)
- (24) 柳田國男：「阿遅摩佐の島」, 『海南小記』, pp.214~253, (1952)
- (25) 九州森林管理局：大隅森林管理署「天然記念物ソテツ自生地」「枇榔島自然観察教育林」, 『管内国有林紹介』  
<http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/osumi/sub2.html>
- (26) 土佐清水市：「観光地情報」, 『足摺岬のピロウ群落』  
[https://www.city.tosashimizu.kochi.jp/kanko/g05\\_ashizurimisaki\\_birougu-nraku.html](https://www.city.tosashimizu.kochi.jp/kanko/g05_ashizurimisaki_birougu-nraku.html)
- (27) 島嶼名辞典ーweblio 文化(<http://www.weblio.jp/cat/culture/ntsmj>)
- (28) 日の出日の入り時刻方角マップ <https://hinode.pics/>
- (29) 山田俊宏：「ピロウの社の起源：隔離分布は植物の文化的利用によってもたらされたのか?」, 『科学研究費助成事業 研究成果報告書』, (2017)  
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-26440219/26440219s-eika.pdf>
- (30) 西谷 正：「小呂島見聞記」, 東アジアの古代史を楽しむ会報『鼎』, 13 号, (2014)
- (31) 竹内理三編：『平安遺文』, 東京堂出版, 10 巻, p.1, (1962)
- (32) 淤能基呂太郎：『古事記日本神話の故郷は玄界灘の島々だったー神話を科学と伝承で読み解く古代史論ー』, ドリームキングダム, (2018)

※サイト閲覧は 2020 年 9 月 1 日現在